

L.N.トルストイの青年時代における哲学的模索

The young Leo Tolstoy philosophical wanderings

文学研究科社会学専攻博士後期課程在学

江 口 満

Mitsuru Eguchi

はじめに

トルストイは、作家としては、今日世界的な不動の地位を築いているが、思想家、哲学者としては、必ずしもそうとはいえない。たとえば、「非抵抗主義」を中心とする彼の思想は、正しく理解されるよりも、非現実的な思想として誤解されてきたことの方が多かったと思われる¹⁾。生前は、トルストイの哲学論文は、ほとんどが検閲のために本国では出版されず、外国で発表されることの方が多かった²⁾。死後、ロシア革命によって、国内出版の可能性は開かれたが、それもトルストイの思想全体が評価されたことを意味するものではなかった。

トルストイは、50歳を境として精神的な大転換を経験し、以後、自らの信条のままに膨大な哲学的著述を行っている。50歳という節目を経て、それまで欲していたものを、まったく欲しくなくなり、以前は善いと思っていたものを、悪だと思うようになったと、彼のこれまでの価値観が逆転したことを告白している³⁾。また一般に、文豪のこの精神的変化について、若いころは好き放題にしていた彼が、急に道徳的な説教師になったかのように皮相的な見方をされる場合も少なからずある。しかし、彼の青年期に、すでに後年の思想の基盤となるものが形成され始めていたのであり、50歳で見出したとされる彼の人生哲学にも、この青年期の思想とのつながりが色濃く見出される。『懺悔』でも書いているように、その転換は、「ずっと前から私の中にその気配があり、その萌芽は常にあった」のであり、結果的に「もっとも始めの時代、少年時代、青年時代に帰った」⁴⁾のである。トルストイが、自身の価値観が逆転してしまったように言っているのは、名誉と地位、富をほしいままにした壮年期と50歳以降を対比したものとみるべきだろう。つまり、彼の思想は、50歳前と後でまったく変わってしまったということではなく、青年期から試行錯誤を経ながらも、ひとつの同じ方向へ徐々に深まっていきつつ、晩年のトルストイ思想の基盤を形成していったということである。

以下本稿では、トルストイ哲学の源流を成すと思われる青年時代に、彼がどのような哲学的模索をしていったのかを見ていきたい。

I . 人生学としての哲学

1 . 「神」の概念

青年時代のトルストイは、宗教に対してどのような態度をとっていたのだろうか。

『懺悔』によれば、早くから哲学に熱中し始めたこともあり、信仰から離れていったのも結構早く、16歳の時にはお祈りをやめ、教会にも行かなくなった。18歳の頃には、これまで教えられてきたものすべてを信じていなかった。しかし、無神論的な傾向が強くなっていたトルストイが、パスカルの「たとえ宗教が我々に教えるものすべてが間違っていたとしても、宗教を信奉して何も失うものはない。宗教を信奉しない場合は、永遠の幸福の代わりに、永遠の苦悩を味わう危険性がある」との言葉に接して、今度は、うってかわって非常に信心深くなった、という⁵⁾。ただし、N . グーセフの説に従えば、この経験は15,6歳までに起こったことになり、トルストイの説明との間に時系列的な矛盾があることになる。

しかし、教え込まれてきたもの、つまり教会の教義は、結局真剣に信じたことがなかったと自身で述べている。とにかく教会信仰を受け入れる、受け入れないに関わらず、トルストイは常に宗教的探究心をもっていた。それは、当時の日記からもよくわかる。彼の日記は18歳(1847年)からの思想形成過程をたどるうえで重要な手がかりといえるが、初めて日記をつけた日に、彼は次のように書いている。

「個々の人間の理性は、すべての存在の一部である。・・・自分の理性が、人間社会のような部分的なものと合致するのではなく、全体をなす、すべての根源と合致するようにせよ」(日記1847年3月17日)⁶⁾

また、同年4月17日の日記には、「人生の目的は、存在するすべてのものの総合的發展を可能な限り助けることである。・・・不死の魂は、発展して、ふさわしいより高い存在へと自然に移行する」とある。⁷⁾

ここにみられる特徴的な考え方は、「すべての根源」と「魂の不死」である。ここで「すべての根源」というのは、トルストイが考えるところの神であったといえよう。この二点は、トルストイの宗教観の根幹をなすものとして、終生変わらないものである。

トルストイは、神を人格神や、創造主としてはとらえていなかった。また、日記にあるように、教会が説く三位一体の神を彼は信じてはいなかった。

「自分の信仰を簡単に図式化してみた。普遍的、不可知の善なる神と心の不死と、我々の行為に対する永遠の報いを信ずる。三位一体の秘密や神の子の誕生は理解できない・・・」(1852年11月14日)⁸⁾

「神の存在は証明できない、・・・そのような概念は必要でないように思われる。世界を創造した存在を考えるよりも、むしろ、不可知のすばらしい秩序をもった世界全体の永遠なる存在を考えるほうがわかりやすい」(1853年7月8日)⁹⁾

このような神のとらえ方は、次にあげるような、晩年の神に対する考え方と、本質的には変わっていない。

「私は、すべての根源から分与された『精神的なもの』が自分の中にあるのを知っている。同じように、すべての根源から分与された『精神的なもの』が他の人々の中にもあることも知っている。その『精神的なもの』が自分の中にも、他者の中にもあるならば、『精神的なもの』それ自体が存在するはずである。それを神と呼んでいるのである」¹⁰⁾

「神を知ることと、生きることは、同じ事である。神はすなわち、生である」¹¹⁾

トルストイにとって、「神」とは、人間とかけ離れた超越的存在ではなく、人間も同質のものとして、その一部をなすものであった。彼は、「神」を権威と神秘のヴェールによって人間と切り離すことをよしとしなかった。それはしかし、「神」を人間のレベルに引きずり下ろすのではなく、人間に崇高な「神性」を見出すことを意味している。その意味で「神」は、トルストイにとってもっとも身近な、慕ってやめぬ存在にほかならなかった。22歳の頃、自ら体験した歓喜の祈りについて、彼は次のように書いている。

「私はゆうべ、一晩中眠らなかつた。日記を書いた後、神に祈り始めた。祈りの時に私が感じた歓喜は表現できない。・・・もしも祈りがお願いや感謝を意味するとしたら、私は祈ってはいなかつたといえる。私は、なにか崇高なよいものを願っていたが、それが何なのかは、表現できない。・・・私は『すべてを包括する存在』と融合したかつたのだ」(1851年6月12日)¹²⁾

2. 「私」とは何か

では、「すべてを包括する存在」と融合すべき「私」、そして「すべての存在」の一部である「私」について、青年トルストイはどのように考えていたのだろうか。トルストイの定義では、「私」という意識は、「私」がさまざまな程度の活動または運動をしながら存在していると思うことである¹³⁾。そのような想念を支えているのは記憶であるが、記憶は脳に損傷が起これば消えてしまふし、死によってそのすべてが消えてしまふ。しかしながら、「私」という意識だけは消えずに残るのである。

「私」の中に、トルストイは「有限なるもの」と「無限なるもの」を見出す。前者は外的世界に依存し、記憶の消滅とともに消えるが、後者は、外面的なものから独立していて、死によっても消滅することはないのである。

また、トルストイはこの「私」の本質を「願望」＝「意志」であるとしている。「私は欲する」-、これが唯一反駁しえないものである。「考える私がある」というデカルトの命題に対して、トルストイは、では何のために私は考えるのか-、それは真実を知りたいから、だまされたくないからだとしている。つまり、思惟の奥に願望＝意志があるとするのである。

すると、先の「有限なるもの」は「有限なる願望」、「無限なるもの」は、「無限なる願望」といいなおすことができる。前者は外的要因を起点とし、「欲求」と呼ばれるものであり、後者は内的要因を

起点とし、「意志」と呼ばれるものである。「有限なる願望」は、原因を外の世界にもっているから、外の世界の原因が消えれば「有限なる願望」そのものも消える。一方、「意志」とか「無限の意志」とトルストイ呼ぶところの「無限なる願望」は、肉体からも、時間からも独立しており、自らを決定し、自らを満足させる不滅のものであり、いいかえれば「願望自体」である。

晩年、トルストイは「欲する私」が人間の本質であるという前提にたって、次のように「有限なる私」、「無限なる私」を説明している。

「それぞれ異なる個々の人間は皆、同じ精神的本質をもっており、イワンもナタリヤもひっくりめて私たち皆がまったく同じ精神的存在なのである。そして私たちが『私は欲する』というとき、それは時として、イワンやナタリヤが欲している場合もあるし、あるいは、皆に共通の精神的実在が欲している場合もある。だから、イワンやナタリヤがあるものを欲しているのに、彼らの中にある精神的実在はまったく別のものを欲しているという場合もある」¹⁴⁾

このように「有限なる私」と「無限なる私」を比べると、当然ながら後者の方が、現れ方はさまざまであるにせよ、前者に対して永遠に優越している。しかし、ほとんどの場合、現実には欲求が意志に勝っている。だが人間は、けっして到達できないにしても、意志の完全な優越を目標として常にめざすべきだと、若きトルストイは結論するにいたる。ここから自己形成 -、自己の精神的成長の必要性が導き出されてくる。

3 . 自己鍛錬の要求

トルストイの哲学は、「何のために生きるか」を常に問題としており、真に意味のある生き方、つまり真の幸福を達成するにはどうするべきか、という疑問から出発しているといえる。もっとも早い時期（18 - 24歳の間）に彼が書いた「哲学の目的」という未完の論文には次のようにある。

「人間は志向している。つまり活動している。その活動は何に向けられているのか。どのようにしてこの活動を自由にできるか？それが哲学の真の目的である。いいかえれば、哲学は人生学である。

すべてのものがもつ志向とは、生の意識であり、生を保持・増強しようとする願望である。

生の増強とは、より多くの感動を得ること、あるいは幸福といわれるものである」¹⁵⁾

さらに、その「幸福」とは、外的世界の偶発的な快い印象に求めるべきものではなく、「すべての印象が自分の欲するように作用するべく、自己形成をすることに求めるべき」だとしている。さもなければ、「人が家の中に入るかわりに、家を自分のところへ動かそうとする」ことになってしまうのである。

つまり、自分の外のものに依存するのではなく、自分自身が幸福を作る主体者たるべく自己を鍛錬するべきだと言うのである。これは、トルストイが運命論者でないことを物語るが、かといって彼は運命を否定しているわけでもない。彼は、運命は存在するが、それが幸不幸には直接結びつかないと考えるのである。「運命というのは、善悪（内面的善悪のこと - 筆者）とは関係のない部分だけを支配

するものだと思う」 - 1851年11月29日の日記（25歳）にこのように書いている¹⁶⁾。

このように、トルストイは、若い頃から、幸福をもっぱら人間の内面世界と結びつけており、どんな運命がおそっても、それを悠然と乗り越えられるかどうかにかかわらず幸福の基準をおいているといつてよい。つまり、トルストイにとって、幸福とは「自由意志」に関わる問題であり、「自由意志」によってなされる善悪によって、人間の幸不幸が決まっていくとするのである。

「幸福には二種類ある - 有徳の人々の幸福と、虚栄の人々の幸福である。前者は徳から生じ、後者は運命から生じる」 - 22歳のトルストイが日記にこう記している¹⁷⁾ように、彼は外面的な幸福を真の幸福として認めていない。

もっとも、現実には、トルストイ自身やはり生身の人間であって、色欲や名誉欲に悩まされ、賭け事に夢中になり、彼がめざす理想と現実とのあいだには大きなギャップが見られる。一方の放埒さと、他方でストイックに自己形成に努める姿には、通常では考えられないような大きな落差がある。あえて推測するとすれば、作家として、あらゆる人々の境遇を経験し、その心を知るためにわざと実験をしているようにも思われてくる。

トルストイは、青年時代から、自己鍛錬のための具体的課題を常にわが身に課して、その内容と実行状況を詳しく書き残している。また、道徳を重視した晩年の宗教観も、「幸福達成」という青年期の目的から出発したものといえる。この目的は、彼にとってけっして抽象的なものではなく、必ず実現すべき現実的なものであった。自己に課した鍛錬も、彼は非常に具体的に計画をたてており、肉体的鍛錬としての体操のやり方まで細かく記述している。

人間は一人で生きているのではないから、皆が自分の外に幸福を求めだすと、個々人の利益はぶつかり、社会は混乱をきたす。しかし、もしも各人が自分自身の精神的成長をまず第一に考えるならば、そこから他者への思いやりが生まれ、社会の秩序が乱されることはありえない。

青年トルストイは、このように彼独特の幸福論を展開しているが、ここには人間の成長の可能性に対する強い信頼があるといえよう。彼は決して何かにすがろうとせず、またどこか遠いところに幸福を求めたとしてもなく、あくまでも人間の内面に希望を見出そうとするのである。

先にも述べたように、青年時代の日記には、自分が課題をどれほど遂行したか、あるいはしなかったかという、自分の行動を猛省する記述がきわめて多い。普通これほど自分を批判すれば、自信をなくしてしまって、自分などどうせだめな人間だと思ってしまうようなものだが、トルストイはそれにもめげず、さらなる課題を自分に課して自己形成に努めようとしている。彼自身も、「これまでどれほど自己形成につとめてきたことだろう。でも、私は大きく成長したのだろうか？もう、絶望してもいい頃だ。しかし、私はまだ希望を捨てておらず・・・」（1852年6月3日）と書いているとおりである¹⁸⁾。また、トルストイは、自分の弱点を見つめること自体に大きな意味を見出しており、それができれば、弱点を克服することができたと考えていたところがある¹⁹⁾。そこには、自分を含めた人間の善性への強い信頼がみとれる。それは、トルストイ自身の次の言葉によっても裏付けられよう。

「もともと人間は善良であるから、徳というのは、欠点をなくすということにすぎない。だから私は欠点を直そうと思ったのだ」(日記1855年3月18日)²⁰⁾

ところで、トルストイをこのような自己鍛錬にかりたてたのは何だったのだろうか。原因のひとつとして、当時彼が傾倒していたルソーの影響が考えられる。E.I.ラーチンは、そこに「エミール」の大きな影響を見出している²¹⁾。トルストイ自身、ルソーの著作について「まるで自分の考えを読んでいるような気がした」と語っている²²⁾。上述のような自分の弱点を徹底的に指摘する傾向性は、たとえば次のような「エミール」の一節に説得力のある根拠を見出すことができる。

「誘惑に負けるばあい、わたしは外部のものの力によって動いている。そういう弱さを自分にとがめているときには、自分の意志にだけ耳をかたむけている。わたしは、悪いことをしているときには奴隷だが、後悔しているときには自由な人間だ」²³⁾

ただし、自己分析と道徳的向上心という特徴は、ルソーを読む前から見られる²⁴⁾。ルソーの影響については多くの人が言及しているが、E.I.ラーチンやN.N.グーセフも言っているように、トルストイの中にもともとあった考え方が、ルソーの思想と非常に近かったために、これほど夢中にさせたのではないか。いずれにしても、自己形成に努めながら、トルストイは前述の「無限の意志なる私」を信じ、それを人間の根本的なあり方と見ていたわけだが、それはとりもなおさず、永遠の生命を志向する彼の世界観と結びついていたといつてよい。

魂の不死

1. 永遠の生命

若きトルストイは、死によってすべてが消えてしまうのではなく、「意志」は無限であるから、時間も空間も越えてずっと存在し続けると考えている。上述のように、彼が18歳のときに書いた日記の中に、すでに「不死の魂」についての記述があり、その後も「肉体が死ぬのは見たことがあるし、したがって、私の肉体も死ぬだろう。しかし、魂が死ぬのを証明するものは何もない。従って魂は不死だ・・・」(1852年7月13日)、「心は死とともに変わるが、消えはしない。つまり、心は死なないのだ」等と書いている²⁵⁾。

また、その前年には、「・・・啓示のようなものを体験した。魂の存在すること、それが不死であること・・・私たちの存在に両面性があることと、意志の本質 - がはっきりとした」(1851年12月22日)との記述もある²⁶⁾。

トルストイのいう不死とは、「死後に授かる永遠の生」という意味ではない。この生を終えたあとだけに永遠の生があり、生まれる前に何もない、という「片方だけの永遠」はありえない、とトルストイは考えた。「私の頭は、片方向にだけ永遠があるという考えを拒絶する」(1852年6月29日)²⁷⁾。たしかに、「永遠」ということからいえば、そこに始点を想定すると、「永遠」という概念と矛盾する

ことになる。

「片方だけの永遠の拒絶」は、トルストイが当時、考えていた「シンメトリー論」から来ている。これは、「心があとに存在するというのであれば、前にも存在しているはずである。従って片方だけの永遠はありえない」という理論であり、それは、対称の感覚によって裏打ちされる。人間は常にシンメトリーを求めるものであって、永遠 生 永遠、というふうになるはずだ、というのが、当時、トルストイが自力でたどりついた、存在論的世界観であった²⁸⁾。「永遠」という概念も、当時、自ら築いた時空論にもとづいている。晩年の述懐によると、15歳の時、時間と空間について、次のような結論にいきついたという²⁹⁾。時間とは、同じ空間にあって、順番にしか想像できない多くのものを想像するための人間の能力で、空間とは、同じ時間に複数のものを想像するための人間の能力である。そして、心は、そのような時間と空間の枠外にある永遠の存在なのである。

このような死生観は、その後も生涯変わることはなかった。また晩年にはこれをよりわかりやすく、具体的な表現で説明している。

「人間の誕生から死までの人生は、目覚めてから、眠りにつくまでの一日の生活のようなものである」³⁰⁾

人間の身体は、子供から大人へと成長し、そして老化するというように、絶えず変化する。意識も絶えず変化する。それでもAさんはAさんであり続け、Aさんがある日、Bさんになったりすることはない。それは、一貫した自我があるからであり、その自我は、「時間」という概念の外にあって、常に存在しているものなのである。『生命について』の中で、晩年のトルストイは、このように説明している³¹⁾。

2. 初期作品と実生活を通しての「死」

トルストイの幼年期は、最初から「死」が大きく影を落としていた。母が2歳の時に、父が9歳の時に死んだということは、小さな子供にいやでも「死」について幾度も考えさせる契機となったことだろう。それでは青年トルストイにとって、「死」はどんな意味をもっていたのだろうか。

精神の覚醒を経験したあとのものではあるが、『懺悔』に、次のような一節がある。

「これらの人々(民衆)は、生き、苦しみ、そして落ち着いて、喜びさえ感じつつ死を迎えている。対照的なことに、貴族の間では、恐怖や絶望のない安らかな死はごくまれであるのに対し、民衆の間では、動揺したり、抵抗したりするような暗い死は、めったにない」³²⁾

これは50歳の時の言葉ではあるが、初期の作品などを見ても、青年時代にすでに同じような考え方をしていたことが伺える。

また青年時代、「業」の思想ともいえる考え方をもっていた。それは、「我々の行為に対する永遠の報いを信ずる」と24歳のときに日記に書いていることからわかる。トルストイにとって、人生は、決して偶然の集積ではなく、自分の行いに応じた報いをだれもが必ず受けることになっており、それ

は「死」に対する態度にも影響するのである。

日本人は、悪事をはたらくと「タタミの上で死ねない」などということがあるが、ここには仏教の因果応報の考え方が反映されているといえるだろう。いわば生き様が死に様に反映するのである。しかし、ロシアでは、一般にキリスト教世界では、といえるかもしれない、死後に地獄に行くということはあっても、死に方に生き様との関連を求めることは、あまりない。従って、上に述べたトルストイのような考え方は、ロシアで一般的なものとはいえず、むしろ東洋的な考え方に近いといえるように思う。

(1) 2つの死のコントラスト

『幼年時代』と『少年時代』には、おだやかな召使のナターリヤ・サービシナの死と、それと対照的な主人公の家族の死が描かれている。そこに反映されているのは、これらの作品を書いていた23、4歳当時の死生観であり、またこれらの作品には自伝的性格が強く、作者の経験がベースになっている。ここで驚かされるのは、トルストイがまったく記憶にない、しかも影絵の肖像以外、姿を想像する手がかりが残っていない、それ故に永遠の理想的女性像としてトルストイの心に刻まれていたはずの母親が「恐ろしい苦しみの中で死んだ」ように描いていることである。上述のような彼の死への態度を考えあわせると、なぜ、聖なる存在ともいうべき母親が苦しみながら死んだ、と書いたのか、という疑問が生じてくる。

『幼年時代』は、初稿では、両親が正式な結婚をしていない友人の家庭をモデルにして描かれた。子供が法的には私生児であることを気に病み、子供たちにその事実を告白して、苦しみの中で母親は死ぬのである。しかし、第二稿では、大きく構成が変わり、正式に結婚した普通の家庭が舞台になっていて、トルストイ自身の子供時代が色濃く反映されてくる。母親の描写も、初稿では、外見が詳しく描かれていたが、第二稿では、外見描写はほとんどない。それは、N.ゲーセフも言っているように、自分の母親の姿により近づけようという意図があったと考えられる³³⁾。しかしそれにもかかわらず、母親が「恐ろしい苦しみの中で死んだ」という描写は、第二稿にもそのまま残っているのである。

実際にトルストイの母が死んだ状況については、いくつかの説がある。

トルストイは、母の死を「産後の肥立ちが悪かったため」と言っているが、当時の目撃者の話では別の説がある。彼女をみとった隣人のY.オガリョーフは、「神経性熱病」が数日続いて死んだ、と語っている。

一方、ソフィア夫人から、夫の叔母たちからの話として、ゲーセフが聞いたところでは、やはり産後の肥立ちが悪かったためだが、産後すぐではなく、数ヵ月後に死んだという。また、その頃、本を逆さにもつなどの神経障害があった、ということである。

さらに、トルストイの妹 MARIA が、彼女の子供の乳母であるタチヤーナ・フィリップオブナから聞いた話では、ブランコが好きだった母が、あるとき農奴にブランコを揺すらせていたが、揺れが大きす

ぎて板がはずれて頭にあたった、それから頭痛がするようになった、ということである。ただ、このことが公になると、ブランコを振っていた農奴が罰せられるので、母はあえてそのことを言わなかった、という³⁴⁾。

『幼年時代』では、ニコレンカの母ナターリヤ・ニコラエブナが死んだ原因は次のように述べられている。馬車で出かけて馬がぬかるみにはまり、いいお天気でもあったので、馬車の引き上げ作業をしている間、しばらく歩くことにした。しかし、引き上げをしてくれる人々が集まるのに時間がかかり、底の薄いくつをはいていたため足が冷えてしまい、それが原因で病の床につき、その後まもなく容態が急変して死んでしまうのである。

ナターリヤ・ニコラエブナは、平穏で幸福な家庭生活を送っていた。彼女が死の数日前に夫にあてて書いた手紙には、いかに愛情深い母であり、妻であったかが、よくあらわれている。

「私にとって、生きることというのは、愛と切り離しては考えられないものですが、私は今、あまりにも愛しすぎているので、その愛がいつか消えてしまうなどとは考えられません。・・・私の魂は、家族への愛情と切り離しては存在しえません。でも、私の愛のような感情が、もしもいつか消えなければならぬのであれば、最初から生じるはずもないのですから、その一事をとっても私の魂は永遠なのです³⁵⁾

夫は賭け事が好きだが、彼女はそれを責めることもしない。ただ、子どもの将来だけが最大の心配事であった。夫の賭け事が子どもの財産を取り崩すことにならないかどうか心配であった。

臨終の床にあって、彼女は、最後に「聖母様、あの子たちをお守りくださいますよう!・・・」³⁶⁾と言いつつ、恐ろしい苦しみの中で死んでいったのである。

永遠の理想の母を、作者はなぜ苦しんで死んだように描いたのだろうか。たとえ、実際に自分の母が苦しみながら死んだと聞かされていたとしても、小説では自由な描写ができるはずである。しかもその後、母の苦しみの死とは対照的な召使のナターリヤ・サービシナのおだやかな死を描いているのである。

ナターリヤ・サービシナは、若い頃、執事フォーカとの結婚の許可をニコレンカの母方の祖父に願い出て、怒りをつけた。その後、自分の「エゴイスティックな」愛情を捨てて、主人一家に無私無欲の精神で仕え、女主人の嫁ぎ先にも共に移って、変わらぬ姿勢で生涯仕えきった。彼女は、主人一家の家政を司る者として、だれにもえこひいきせず、そのために、誰ともあまり親しくしないようなところさえあり、忠実に自分の責任を果たしていった。そうして、「彼女は、未練を残すことなく生に別れをつけ、死を恐れることなく、むしろ幸福として受け入れたのだった」³⁷⁾

このモデルは、トルストイ家の家政婦であったプラスコーピア・イサエブナであり、作品中に書かれたことは、すべて事実にもとづいているとトルストイは、『回想』の中で認めている³⁸⁾。彼女は、死期をさとって、自分のかたみやささやかな蓄えをすべてあげるべき人に渡し、身辺を整理して、泰然として死に臨むのであった。

「ナターリヤ・サーピシナが死を恐れずにすんだのは、ゆるぎない信仰をもち、福音書の掟を実践しきっていたからだ」³⁹⁾ トルストイはそう結論し、彼女の死をもって『幼年時代』を終わっている。

この対比された二つの死をどのように解釈したらよいのだろうか。

『幼年時代』の母、ナターリヤ・ニコラエブナは、やさしい母、妻であり、敬虔な信仰者であったにもかかわらず、苦しんで死ななければならなかった。他方、家政婦のナターリヤ・サーピシナは安祥として死を迎えた。人間性、信仰心という面でみれば、主人公の母と家政婦は同列に評価できるといえる。この二人が大きく違うのは、身分、運命的に決められたそれぞれの境遇である。

貴族として暮らしながらも、庶民の生活も間近に見ながら育ったトルストイは、両者の本質的な違いをさぐろうと思案をめぐらしたであろう。彼は庶民と貴族を対比させて、「庶民は勤労と困苦に満ちた人生によって、我々よりもはるかに高い位置にある」と考えている⁴⁰⁾。

勤労と困苦は、生の本質的な部分を見つめるように人間に作用する度合いが、裕福な生活におけるよりもはるかに大きい。結果的に、庶民は多くの場合、生の本質をなす心の世界を見つめ、信仰をえることができるのである。一方、貴族の生活は、勤労と困苦から開放されているがために、開放によってできた空洞に虚栄・虚飾がはびこってしまい、本当に大切なものが隠されてしまう。また、制度的に貴族の生活は、多数の民衆の犠牲の上に成り立っているのであるから、生活そのものが本源的な法則とは矛盾するものをはらんでいると考えられる。

愛する母といえども、やはり他者の犠牲の上に成り立った生活をする貴族階級であることには変わりなかった。だから彼女は「恐ろしい苦しみの中で」死んだのだろうか。しかし貴族の間で「安らかな死はごくまれ」というならば、安らかな死もたまにはあるわけで、しかも母親が素晴らしい人間性と信仰心をもつ人であるならば、その「ごくまれ」な一人になる資格を彼女ももっていたはずである。

これについては、次のような推測が可能ではないかと思われる。それは、母があまりにも子どもたちを愛しすぎていたからだ、すなわち母の苦しみは、子への愛情の裏返しであった、というものである。母の死に際しての苦しみは、自分が死にたくないというエゴイズムからくるものではなく、愛する子供たちが母親（自分）を失ってどれほど悲しみ、苦しむだろうか、子供たちの運命はどうなっていくのだろうか、という残される子への強い不安、心配であった。母の苦しみながらの死を描くことによって、彼女の子供（トルストイ自身）への深い愛情をトルストイは描きかかったのだ、- このような解釈も成り立つのではないだろうか。しかも、上記の母の言葉にあるように、魂は不死であり、ということは、あふれんばかりの愛も不死であるから、肉体的な死が訪れても、母の魂は、死なない、ということになる。この『幼年時代』の描写は、トルストイが母の死について、周囲の人から話を聞き、実際に苦しんだ様子を知って、なぜ愛する母が苦しまなければならなかったか、思案を重ねてたどりついた結論であったかもしれない。

(2)父と祖母の死

延命技術が進み、病院で人工的に生かされている現代とちがい、トルストイの時代は、死がはるかに身近なできごとであったろう。ましてや、幼くして両親を亡くしたトルストイは、「死」とは何かを常に考えていたに違いない。P.I.ピリュコフが書き留めたトルストイの談話に、父の死は、子供時代にあってもっとも衝撃的なできごとであり、初めて「生」と「死」の問題に対する「宗教的な恐怖」を感じた、とある。また、父の死が離れた場所で起きたため、長い間、本当に死んだことが確信できなかったという⁴¹⁾。

父は、トルストイが9歳の時に、裁判争議に疲れ果て、健康を害し、ある日路上で倒れて死亡している。そのため、物盗りによる殺害ではないかなどという憶測も呼んだ。このような父の死をめぐる謎めいた状況も、いやましてトルストイに「死」について考えさせるインパクトを与えたことだろう。

さらにその一年後、トルストイの祖母が亡くなっている。その時も、生と死の宗教的な意味についてあらためて考えさせられた、という⁴²⁾。祖母は、逝去まで長く苦痛にさらされ、最後には浮腫ができていた。最後のお別れに祖母のもとへ連れられていったとき、祖母はやっとの思いで孫の方を見、真っ白な手をじっとしたまま孫たちにキスをさせた時に、自分は恐怖を感じたと、トルストイは後に語っている。祖母の死の描写について、「宗教性とともに、怨念を表現することにした」と日記に書いている⁴³⁾。

このように、「死」の問題は、トルストイの処女作品にかなり大きな位置を占めているといつてよい。『幼年時代』は、次のような一節で結ばれている。

「果たして神は、永遠にこの二人のことを悼むためだけのために、私と縁を結ばせたのだろうか・・・」
44)

ここには、大きな悲しみをもたらす「死」の中に、負の面だけではなく、正の面をも見出したいという思いが見てとれる。また、ナターリヤ・サーピシナが死をむしろ「幸福として受け入れた」という記述にも、「死」の積極的な面を見ようとする目が感じられる。この「死」の問題が、トルストイを心の不死という結論へ導き、そこから、「無限の意志」なる自己の鍛錬という思想へと導いていった、と仮定することも不可能ではない。もっとも、そのような論理の積み重ねだけで、道徳的向上心が生まれたと考えるのは、やや短絡的であり、そこには生来の性格や環境といった要因も大きく働いたというべきであろう。しかし、少なくとも、トルストイの「死」のとらえ方と、「精進の哲学」ともいうべき彼の人生に対する態度には、有機的なつながりがみられるのである。

終わりに

トルストイは、自分の人生を次のように時代区分している。

14歳まで 罪のない詩的な時代

14 - 34歳 ひどい時代、放蕩と虚栄

34 - 50歳 結婚から、精神の覚醒まで。表面的には正直まっとうな家庭生活、しかし、家庭しかかえりみないエゴイスティックな時代、資産を増やし、作家としての名誉を高めたいという時代。

50歳以降 真理への目覚め。最高の幸福⁴⁵⁾。

本稿で取り上げた時代は、「罪のない詩的な時代」と、次の「放蕩と虚栄のひどい時代」の20代前半までであるが、最初の時代が14歳までとなっているのは、性欲が目覚めたのが14歳だからである。本格的な哲学的・宗教的探求が始まったのは、15歳からだが、それは自我の目覚めに伴う精神的な葛藤の始まりと期を同じくしている。

この頃のことを思い出しながら、トルストイは、最晩年に青年たちへのメッセージとして、当時の自分は、人生の目的は、献身と愛だと感じていたが、そのような自分の考えを信じずに、世間知に染まってしまったと懊悔し、青年たちに、自分の内なる声を信じてほしいと呼びかけている⁴⁶⁾。これは、トルストイの青年時代の思想と晩年の思想とが結びついていることを物語っているといえよう。だからこそ、トルストイは晩年に「少年時代、青年時代に帰った」と言ったのであろう。このように、青年時代の世界観はその後のトルストイ哲学の基礎となっているといえよう。

¹ 一般的に「無抵抗主義」と訳されることが多く、「悪と戦わない」という誤った意味にとられる場合があるが、トルストイは、あくまでも「悪に対して悪で報いない」という意味で言っているので、日本語で間違った消極的イメージを避けるために、あえて「非抵抗主義」とした。

² 精神の覚醒を経験したあと、トルストイは哲学論文を書き始めるが、最初の『懺悔』から、『教義神学研究』、『わが信仰』などすべて検閲を通らず、海外で出版されるか、ひそかに国内で人づてに伝わっていった。

³ Толстой Л.Н., «В чем моя вера?», *Полное собрание сочинений*, «TERRA», 1992, Т.23, С.304.

⁴ Толстой Л.Н., «Исповедь», 同46ページ。

⁵ Гусев Н.Н., Лев Николаевич Толстой – Материалы к биографии с 1828 по 1855 год, изд. Академии наук СССР, 1954, С.174., Толстой Л.Н. «Варианты из первой и второй редакции «Отрочества»», *全集 第2巻*, 287ページ。

⁶ Толстой Л.Н., «Дневник», *全集 第46巻*, 4ページ

⁷ 同30ページ。

⁸ 同149ページ。

⁹ 同167ページ。

¹⁰ Толстой Л.Н., «Путь жизни», *全集 第45巻*, 60ページ。

¹¹ Толстой Л.Н., «Исповедь», *全集 第23巻*, 46ページ。

¹² Толстой Л.Н., «Дневник», *全集 第46巻*, 61ページ。

¹³ Толстой Л.Н., «О цели философии», *全集 第1巻*, 230ページ。

¹⁴ Толстой Л.Н., «Путь жизни», *全集 第45巻*, 36ページ。

¹⁵ 同229ページ。

¹⁶ Толстой Л.Н., «Дневник», *全集 第46巻*, 240ページ。

-
- 17 同72ページ。
- 18 同121ページ。
- 19 トルストイは「私が日記に率直に書いているとき、自分の弱点に対して腹立たしさなどは感じない。弱点を認めることで、もう弱点はなくなると思っているからだ」と青年時代に書いている。Толстой Л.Н., “История вчерашнего дня», 全集 第1巻、291ページ。
- 20 Толстой Л.Н., «Дневник», 全集 第47巻、38ページ。
- 21 Рачин Е.И., «Философские искания Льва Толстого», Изд. Российского университета дружбы народов, 1993, С.27.
- 22 同上198ページ。
- 23 ルソー、『エミール』(中)今野一雄訳、岩波文庫、150ページ。
- 24 トルストイは、14 - 5歳の春、道徳的な精神の高揚を初めて感じたという。Н.Н.Гусев, Лев Николаевич Толстой – Материалы к биографии с 1828 по 1855 год, изд. Академии наук СССР, 1954, С.174.
- 25 Толстой Л.Н., «Дневник», 全集 第46巻、134ページ。
- 26 同240ページ。
- 27 同128ページ。
- 28 Толстой Л.Н., «Варианты из первой и второй редакции «Отрочества», 全集 第2巻、286ページ。
- 29 Толстой Л.Н., «Дневник», 全集 第53巻、56ページ。
- 30 Толстой Л.Н., «Путь жизни», 全集 第45巻、447ページ。
- 31 Толстой Л.Н., «О жизни», 全集 第26巻、XXVIII, XXIX参照。
- 32 Толстой Л.Н., «Исповедь», 全集 第23巻、40ページ。
- 33 Гусев Н.Н., Лев Николаевич Толстой – Материалы к биографии с 1828 по 1855 год, изд. Академии наук СССР, 1954, С.355.
- 34 同57-58ページ。
- 35 Толстой Л.Н., «Детство», 全集 第1巻、80ページ。
- 36 同84ページ。
- 37 同95ページ。
- 38 Толстой Л.Н., «Воспоминания» 全集 第34巻、372ページ。
- 39 Толстой Л.Н., «Детство», 全集 第1巻、95ページ。
- 40 Толстой Л.Н., «Дневник», 全集 第46巻、184ページ。
- 41 Толстой Л.Н., «Приложение. Записи П.И.Бирюкова со слов Толстого (1905), 全集 第34巻、402ページ。
- 42 同上
- 43 Толстой Л.Н., «Дневник», 全集 第46巻、176ページ。
- 44 Толстой Л.Н., «Детство», 全集 第1巻、95ページ。
- 45 Толстой Л.Н., «Воспоминания», 全集 第34巻、347ページ。
- 46 Толстой Л.Н., «Верьте себе», 全集 第37巻、64ページ。

* 参考文献 (上記以外)

- 1 . Лескис Г., «Лев Толстой (1852-1869), О.Г.И, 2000
- 2 . Бирюков П.И., «Биография Льва Николаевича Толстого», Государственное изд., 1923
- 3 . Шлковский В., «Лев Толстой», Молодая гвардия, 1963
- 4 . Гусейнов А.А., «Великие моралисты», Изд. «Республика», 1995
- 5 . Мелешко Е.Д., «Философия непротивления Л.Н.Толстого», Изд. ТГПУ им.Л.Н.Толстого, 1999
- 6 . 藤沼 貴, 『トルストイの生涯』, 第三文明社、1993
- 7 . 栗原成郎, 『ロシア異界幻想』, 岩波新書、2002